

石渡産婦人科病院における

無痛（硬膜外麻酔併用分娩）分娩について

<はじめに>

分娩・出産時の痛みを和らげる方法はいくつかあります。歴史的には静脈麻酔薬、吸入麻酔薬などで全身麻酔を利用していた時代もありましたが、現代、無痛分娩で最も一般的な方法は硬膜外麻酔とよばれる麻酔を使用した方法です。当院でも御希望のかた、あるいは医学的に無痛分娩が必要な場合に硬膜外麻酔併用分娩を行っています。

硬膜外麻酔は優れた麻酔方法なのですが、合併症などの問題点もいくつかあります。そのため、当院では妊婦様の安全性を考慮し、医師、助産師、看護師のスタッフが十分対応可能な時間帯として平日の日中に分娩が終了するように陣痛促進剤を使用した計画分娩によって硬膜外麻酔併用分娩を行っています。（原則として夜間、日曜、祝日は行っておりません。）

<方法>

入院日：脊髄の近くの硬膜外腔と呼ばれる場所に背骨の間から硬膜外麻酔カテーテルを挿入します。（まれではありますが、カテーテルを挿入することが困難な場合があります。）また、子宮口をある程度広げるために、子宮口にダイラパンまたは、風船（ミニメトロ）を挿入することがあります。夜 21 時から、絶食になります（水分は飲んでいただいてもかまいません）。

入院翌日：朝 6 時ごろより、分娩監視装置（NST モニター）を装着し、胎児の状態を確認します。また、子宮口を熟化（柔らかくなること）させる目的で、プロスタグランジン E2 を内服します。（子宮口の状態によっては、膣坐剤を使用することがあります。）

朝 9 時頃より、オキシトシン（子宮収縮剤）の点滴を開始します。（膣坐剤を使用するときは、オキシトシンは使用しません。）

陣痛の痛みが出てきて、つらくなってきたら、カテーテルから局所麻酔薬を注入します。

麻酔薬を注入するとおよそ 20～30 分程度で下肢が温かくなると同時に痛みが和らいでいきます。場合によっては下肢が動きにくくなることや痺れ^{しび}がでて歩きにくくなることもあります。また、血圧が低下する副作用がありますので必ず点滴を行います。麻酔薬は約 1 時間ごとにカテーテルより注入します。（痛みが強い場合は、さらに追加することがあります。）また、麻酔薬を使っても鎮痛されない場合には、硬膜外麻酔カテーテルを再度入れなおすことがあります。

夕方の時点で、分娩の進行がみられない場合は、一度お薬を中止し、次の日に再度陣痛の促進をすることがあります。

<硬膜外麻酔分娩の効用>

1、 出産での痛みの軽減

硬膜外麻酔併用分娩は陣痛（子宮収縮による強い痛み）や産道が広がるときの痛みを和らげる効果があります。「無痛分娩」というと全く痛みが無くなるようなイメージを持つ方もいると思いますが、完全に痛みが無くなるわけではありません。一番痛い状態を10の痛みだとすると、大体3位の痛みになります。

2、 血圧の変動を減少させる。

妊娠高血圧症候群などを合併している方では分娩時の血圧の変動を減少させる効果があります。そのような妊婦様には希望されなくても勧めることもあります。

3、 産道の弛緩作用

陣痛により過緊張になっているときや、産道が硬い方には産道を軟らかくする効果があるとされています。

4、 体力の温存

陣痛は体力を奪うものです。無痛分娩にすることで、産後の育児のための体力が温存できます。

<問題点>

1、 分娩遷延^{せんえん}、吸引分娩の頻度の増加

硬膜外麻酔は陣痛の痛みを和らげますが、同時に微弱陣痛をきたすことがあります。そのため、陣痛促進剤の投与量を調節するのですが、それでも分娩時間は麻酔をしない分娩と比較して長くなることが多いとされています。また、分娩前に感じる怒責感（いきみたい感じ）が消失することがあり、吸引分娩などの器械分娩の頻度が増加します。帝王切開率は増えないと言われています。

2、 鎮痛効果の個人差

鎮痛効果には個人差が大きく大変効果的に鎮痛効果が得られる場合もあれば、満身に鎮痛効果が得られない場合もあります。また、部位により効果に差がでることもあれば左右差がでることもあります。

3、 硬膜外麻酔の合併症

硬膜外麻酔は医療行為である以上、合併症を起こす可能性があります。多くの合併症は対処が可能であるかもしくは自然軽快するものがほとんどですが、重篤^{じゅうとく}な後遺症を残す可能性のある合併症も起こり得ます。安全に行うために、当院では原則として十分な観察が可能な日中の昼間に限って無痛分娩を実施しています。

主な合併症	頻度
低血圧	約 20%
硬膜穿刺後頭痛	約 1%
背部痛	30～40%
局所麻酔薬の血管内誤注入	約 2%
局所麻酔薬のくも膜下誤注入	不明
硬膜下注入	0.1～0.82%
硬膜外血腫	非常に稀
硬膜外膿瘍	非常に稀
神経障害（感覚異常）	1 万例あたり 5～42.3 (照井克生著、「硬膜外無痛分娩」より)

<その他>

1、 麻酔による赤ちゃんへの影響

現在報告されている範囲ではまず影響は無いとされています。また、間接的な影響としては母体の血圧低下による児への血流低下が考えられますが、厳重な血圧の管理を行えば問題ないと思われます。また、母乳に麻酔薬はほとんど移行しないので、授乳することもできます。

2、 病棟の状況により、無痛分娩ができないことがあります。

3、 計画した期日より早く陣痛が発来した場合、時間帯によっては無痛分娩をできないことがあります。

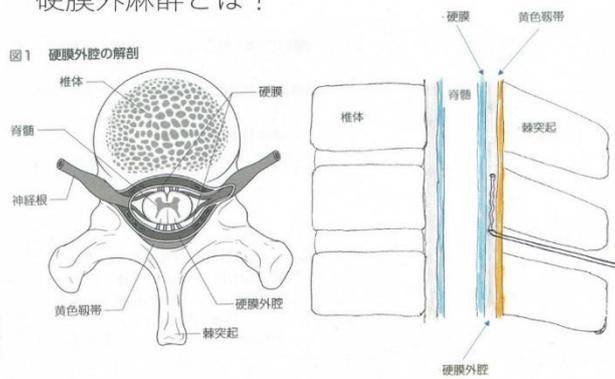
4、 無痛分娩の費用

分娩とは別に 15 万円の費用がかかります。

以上をご理解のうえ妊婦様の安全を重視し、硬膜外麻酔併用分娩をおこなっております。尚ご不明な点は医師にお尋ね下さい。

石渡産婦人科病院

硬膜外麻酔とは？



背中の棘突起の間から、カテーテルを挿入します。そこから、局所麻酔薬を注入することで、陣痛の痛みが軽減します。